

私たちの力で 災害に立ち向かう



地域による自主防災活動

企画防災課 宮地(敦)
TEL 22-1378

あなたが住む地域では、災害が発生した時に、
地域での助け合いが本当に実践できますか。

大規模な災害が発生した直後は、消防隊や救急車などの数に限りがあるうえ、自衛隊などの応援も、倒壊した建物や火災、道路渋滞によりすぐには到達できない状況になります。また、行政職員はさまざまな災害対応業務に追われ、避難所の運営管理に当たることが困難になることが想定されます。

阪神・淡路大震災の時は、避難者による組織が避難所運営の中心となっており、早く自立すること」を目標としてきた地域の方が、立ち直りの早い傾向がみられました。

こうしたことから、災害から命を守り、元の生活を早く取り戻すには、「自分の身は自分で守る(自助)」、「自分たちの地域は自分たちで守る(共助)」が重要です。さらに、自助、共助に「防災

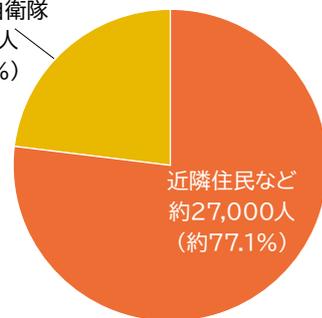
関係機関の取り組み(公助)」が連携し、地域の防災力を向上させる必要があります。

市内には、防災訓練を毎年実施したり、独自の備蓄倉庫を設置したりするなど、自主防災活動に取り組んでいる自治会や地域があります。

平成29年度に多治見市は、地域における自主防災活動に役立ててもらおうと試みとして、3つの組織(地域)を対象に自主防災組織モデル地区サポート事業を実施しました。意見交換を踏まえ、外部の有識者による活動内容の提案や資料作成の補助などを行ないました。

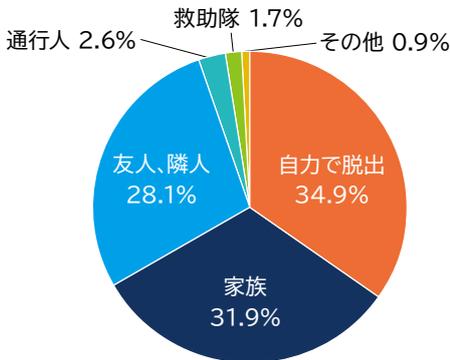
今回は、その三つの組織(地域)の取り組みのほか、市内で自主防災活動に取り組まれている方を紹介します。

阪神・淡路大震災における
救助の主体と救出者数



※「大規模地震災害による人的被害の予測」自然科学第16巻第1号参照

阪神・淡路大震災における
生き埋めや閉じ込められた
際の救助主体など



※「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」参照

滝呂台グリーンビレッジの 自主消防隊



▲滝呂台グリーンビレッジの自主消防隊の皆さん
右から、八木和義さん(自主消防隊、自治会長)、北川憲司さん(自主消防隊長、自治会副会長)、天野修身さん(自主消防隊、自治会事務長)

【天野】滝呂台グリーンビレッジは、昭和53年に誕生し、現在、約5百世帯が住んでいます。同年代の人たちが移住してきたので、お互い協力し合う雰囲気ができあがり、自治会とは関係なく食事をしたり野球チームを作ったりしました。昭和60年にこの地域に15力所の消火栓が設置され、消火栓1台につき15人程度の「自主消火栓隊」を結成することになりました。当初は名簿を提出するだけの、まさしく名前だけの集まりでしたが、平成元年に実際に消火栓が使えることを目的に私たちだけで「自主消防隊」を結成しました。今年で結成30周年を迎えますが、これまで活動を続けてこられたのは、移住当初から培ってきた住民間のつながりのおかげだと思っています。

【北川】自主消防隊の活動の一つに「放水訓

自主防災組織モデル地区サポート事業

平成29年度に実施した3つのモデル地区の取り組みを紹介します。

滝呂29区防災委員会

第29区は、平成23年の台風15号による豪雨をきっかけに、区に防災委員会を設置し、これまでに地域による防災訓練のほか、災害図上訓練(DITG)や避難所運営ゲーム(HAG)を実施してきました。

平成29年度は、このサポート事業を活用し、全世帯対象の住民アンケートを実施しました。その集計結果を基に課題を共有し、地域でできる対応策の検討を始めました。また、防災訓練では、ARアプリを活用した「浸水疑似体験」を新たに試みました。



ねもと地域力(根本校区)地域力向上推進会議

ねもと地域力は、福祉や防災といった地域課題を包括的に取り扱う組織で、その中の防災グループが、家具転

倒防止、通電火災の防止、簡易トイレの購入の普及などに、これまで積極的に取り組んできました。

このサポート事業での意見交換を通じ、防災活動の経験や知識の蓄積を生かし、区や町内会が主体的に活動するための提案や支援の役割が適任であることを再認識しました。

現在、指定避難所となりうる施設の管理者を交え、避難所運営マニュアルの作成に取り組んでいます。

第30区(南姫地区)

第30区は、南姫地域に合った防災計画を策定・実施していくことを目的に、このサポート事業を通じて、次の活動方針を策定しました。

■ 継続的な防災組織を立ち上げ、毎年交代する町内会長との連携体制をつくる。

■ 住民アンケートを実施し、地域の防災課題を把握する。

■ 町内会長が取り組む災害図上訓練(DITG)を実施し、地域特有の危険箇所や課題をより多くの住民に認識してもらう下地をつくる。



練」があります。訓練当日には消防署職員にも来ていただき、実際に放水します。年2回の訓練に約300人が参加します。専用の器具で消火栓のふたを開け、バルブにホースをつないで放水します。一連の動きを実際に体験することが大切です。消火栓があっても、この住民が使えなければ意味がありませんから。

【八木】「阪神・淡路大震災」では、大規模な火災が発生したにも関わらず、交通機能が麻痺し、消防車が現場に辿り着けなかったといいます。実際、多治見においても市内で3件同時に火災が発生したら、4件目の火災現場に消防車はすぐに到着しません。自主消防の目的は、消防車が到着するまでの間、住民の手で延焼を食い止めることです。この団地では、過去に自主消防隊が延焼を食い止めたことがあり、私たちはそれを誇りにしています。

【天野】私たちは住民の皆さんに「防災訓練は避難訓練じゃない」ことを徹底して言います。災害が発生した時に、全員が避難してしまつたら、消火や救援活動をすることができません。要支援者や付添人を除き、全員が災害に立ち向かう覚悟が必要です。いざという時にすぐ動けるよう、今後も自主消防隊の活動を地域ぐるみで続けていきたいと思っています。

